



TITLE:

<書評> 岡本弘道著 『琉球王國海上交渉史研究』

AUTHOR(S):

橋本, 雄

CITATION:

橋本, 雄. <書評> 岡本弘道著 『琉球王國海上交渉史研究』 . 東洋史研究
2011, 70(3): 500-508

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/192933>

RIGHT:

岡本弘道著

『琉球王國海上交渉史研究』

橋 本 雄

古琉球時代の琉球王國を、いかにして等身大に捉えるか。こうした基本的かつ困難な問題に正面から向き合った、實證論文七編の集成である。著者自身の言葉を借りれば、高良倉吉氏をはじめ、「榮光と郷愁とが優越するイメージ」（二四五頁）のもとに古琉球史は語られてきたわけだが、本書では琉球王國の主にも外側からそうした《史實》の多くに是正を迫っている。その點で、本書は既往の琉球史敘述への挑戦の書であり、琉球史研究史上の金字塔を打ち立てたといっても過言ではなからう。第三十八回伊波普猷賞にも輝き、すでに高い評價を勝ち得た作品でもある。

評者は琉球史の専門家でないが、琉球・沖縄に對してはかねてより特別な思い入れを抱いてきた。そして、本書を通じて久しぶりに琉球史を勉強し直したいと考えたこと、日頃から共同研究等において多大な學恩を被る著者岡本弘道氏に少しでも報いたいと思つたことが、本書評をお引き受けした理由である。もちろん、本書で取り上げられている朝貢體制（の見直し）論や勘合の機能・形狀問題、貢期・貢道（の「入り口」＝入貢地點）論などの諸點は、日本史學に立脚する評者の問題關心とも重なり、著者の仕事

にはこれまでも多大な關心を寄せてきた。その點でも、本書の刊行は斯界の慶事として心から歓迎したい。

それではまず、本書の構成を以下に示そう。

まえがき

第一章 明朝における朝貢國琉球の位置づけとその變化——四・一五世紀を中心に——

第二章 明代初期における琉球の官生派遣について——「南雍志」にみえる國子監留學生の位置づけとして——

附錄 「南雍志」中の琉球官生關連記事

第三章 琉球王國の半印勘合と明朝の朝貢勘合との關係について

第四章 古琉球期の琉球王國における「海船」をめぐる諸相

第五章 「新興通商據點國家」琉球の形成と展開について——比較對象としてのハミ・マラッカを中心に——

第六章 明朝朝貢體制から見た琉球の對明朝貢の實態

第七章 古琉球期の琉球王國の交易品——域内社會との關連を中心に——

むすびにかえて

引用文獻目錄／索引

本書の「まえがき」および「むすびにかえて」において、各章の内容がコンパクトにまとめられており、讀者は容易に本書の概要を把握することができる。讀者はぜひともここから、本書に入っていられるようお薦めしたい。

また、本書の上梓に際し、初出稿の発表時から相應の改變も施されており、また本書により初めて日本語で讀めるようになった論稿も少なくない。評者のような中國語の不得手には大變ありがたいことである。著者の多忙ぶりは傍目で見ていても驚くばかりだが、周到かつ綿密に仕上がった本書を手にとると、基礎となった論稿がいかに確かであったかという事實に改めて氣づかされる。

以下、各章の内容を評者なりにまとめ、若干のコメントを附すことにしたい。

「まえがき」では、琉球を本書の検討対象とすることが述べられ、あらかじめその解析の方法が示唆される。琉球（王國）という研究対象は、それが多くの地域や海域に關わるという意味でも、またそれを研究してきた學界・國家・地域が複層的であるという意味でも「多層性」を有しており、だからこそ「それぞれの領分を超えて共通の歴史像を構築」（四頁）していかなねばならない、という。そして、本書のタイトルの一部にもなっている「交渉」の語については、外交や政治・交易といった利害調整のレヴェルばかりでなく、文化接觸や異文化摩擦、自己同一性のゆらぎ等々のレヴェルに關しても注意を喚起する。「交渉」のなかで生まれ、「交渉」のなかで育ち、そしてやがては「交渉」のなかで沈んでいった琉球の歴史を思えば、著者の指摘の妥當性は明らかだろう。

第一章は、本書の總論的位置を占めると目されるだけに、とくに重要な論稿である。明朝誕生とともに、琉球王國（三山）に對しては、「朝貢不時」、「海船」や中國人の「下賜」、比較的自由な

貢道の選擇（詳細は第六章参照）といった種々の優遇政策が敷かれた。倭寇のようなアウトサイダーを含む海商たちの一種の「受け皿」として、明朝により扶植されたのが琉球王國なのであった。しかしながら、琉球王國が單純に明朝の庇護下にあつただけの存在でなく、主體的に行動していたことを、本稿では力強く、しかし冷静に主張する。さらに著者は、琉球の朝貢頻度を愚直に統計することにより、琉球の對明朝貿易の最盛期が洪武十六年（一三八三）以降、遅くとも一四五〇年代以前に設定されねばならぬことを實證してみせた。これは、十六世紀初頭を琉球王國の盛期と見なしてきた從來の歴史敘述を、完全に一新するものだと言つてよからう。琉球王國の永樂帝歿後、明朝が《内向き》になつていくことも符合する傾向である。

《十六世紀初頭が琉球王國の最盛期である》と見なす、上記の通説的理解は、著者も示唆するように、數多くの事蹟を成し遂げた尙眞王を過大評價・理想視してきたことに由來するのである。本書では、尙眞王の時代そのものを正面から論じた箇所は少ないように見受けるが、そこに歸着する方向性については、次のように指摘されている。「明朝の姿勢變化を受けて、琉球は交易活動維持のために努力する一方、國內においても王國支配體制の整備、版圖の擴大、中央集權化への動きなど國家形成の流れを加速させてゆく」（二四一頁）。つまり、明朝の琉球保護政策縮減というピンチの状況下、琉球王國は生き残りをかけて、國家としての成熟度を増していったというわけである。

このほか、先述の「閩人三十六姓」の「下賜」については、「下賜」など傳説に過ぎない、とみる通説的豫見についても、そ

の説の《タネ》となるような事例を複数挙げて一蹴している（無論「閩人三十六姓」傳説をそのままなぞるものでもない）。そして、本書を通じ幾度も觸れられる、《十五世紀半ば晝期論》および《主體的な琉球王國論》が本章で提起されたことも特記しておきたい。本章が本書の總論的役割を果たす所以である。

第二章は、これまで史料的な制約から本格的に論究されることの少なかった明朝初期の琉球人官生について論ずる。既知の『明實錄』等のほかに、新たな史料『南雅志』を併用したところに妙味がある。本章の恐らくもつとも重要な成果は、南京國子監にいた琉球の官生たちが、ときに進貢正使の役割を果たしたり、朝貢・貿易活動に積極的に関わっていたという事實の發掘であろう。これをもとに、一般的な官生の定義に加え、琉球人官生の存在意義の第一を、琉球の進貢業務の補完的役割に求めた點は實に興味深い。また、幾人かの特徴的な琉球官生が具體的に紹介されているのも、本章の議論に厚みを與えている。

ただし、そのなかで扱われた李傑なる人物につき、「その名前からして、後の久米村人に相當する渡來中國人と思われる」（一六八頁）と論ずるが、それでは久米村（人）の成立はいつ、どのようなものと考えられるのが氣になった。史料制約もあり、實證困難であることは百も承知の上だが、次の第三章の「半印勘合」の管理・機能の問題や、第四章の「海船」の船員に關する議論とも併せて、久米村ないし琉華人たちに對する王府の支配・管理体制の實態をどのように想定するのか、何らかの見通しが示されればありがたかった。

また、本章の後半では、北京遷都に伴って琉球官生がなぜ北京

國子監に入學しなかったかという問いが立てられている。それに關して、著者はおおむね次のような見解を示す。永樂帝即位により明朝の支配體制が確立したから、南京國子監での琉球官生の優遇といった國威を發揚しなくても済むようになった、と。しかし、これは、いささか著者らしからぬ齒切れの悪い説明であろう。北京における國子監の役割や機能がそもそも變化したなど、もう少し別の契機を想定できないのか、素朴な疑問を禁じ得ない。また、これはさらに大膽すぎる憶測かも知れないが、永樂帝は、手のかかりすぎる琉球王國を、この段階である程度見限ろうとしていた節はないか。チャンパやマラッカなどを基地にした鄭和の南海遠征を想起すると、少なくとも、琉球とは異なるオルタナティブを永樂帝が得ようとしていたものかと想像を膨らませたくなる。

なお、第二章には附録として、『南雅志』のなかの琉球官生關連記事が一括して掲げられている。讀者の便宜を圖るばかりでなく、琉球・沖縄史研究そのものに直接裨益する、貴重な成果といえよう。

第三章は、過去さまざまに議論され、誤解されることの甚だしかった琉球王國の「半印勘合」について、その實態に迫った論稿である。主な分析の素材は『歷代寶案』となる。私事で恐縮だが、評者は日本の勘合貿易における「日明勘合」に並々ならぬ關心を有してきた者の一人である（參照、拙稿「日明勘合再考」、九州史學研究會編『境界からみた内と外』岩田書院、二〇〇八年）。その意味でも、本章の成果は實に興味深く、また非常に勉強になった。要するに、小葉田淳氏の「半印勘合」理解がもつとも正解に近かったわけだが、後續の研究は盡くこれを無視ないし輕視し、

誤った理解に基づき歴史を敘述してきたのである。《研究史は時に（往々にして？）後退することもある》ということをも、まざまざと見せつけられた思いがする。

さて、本章の結論をかいつまんで述べると、琉球の「半印勘合」とは、ときに誤解されるような明朝の設定した制度ではなく、琉球側が獨自に設定したものであり、進貢の「使節が歸着（「歸國——評者注」）した段階で所定の業務を遂行して歸着したか否かを確認する手段として」（一三〇頁）導入・運用されたと考えられるという。そして、これはとくに著者のオリジナルな発見であるが、この「半印勘合」は、施行當初より、執照（原則として一船につき一通を支給）のみならず符文（北京に上京する人員のID）にも使用されていたらしい。これは琉球の朝貢船派遣船数の計算方法に深く關わるだけに重要なポイントである。

ただし、若干氣になるのは、この「半印勘合」の料紙に書き込まれた符文・執照の機能や役割、なかんづくその效力の限界である。沖縄縣教育委員會『歴代寶案』譯注本第二冊（一九九七年）所收『「歴代寶案」を讀むための用語解説』に見られるように、派遣船の歸國後に琉球王府へこれらの文書が返納されたのはおそらく確かだとしても、これらの文書は、使行の過程でいかなる役割を果たしたのであろうか。執照の文面（文末近く）に表れるような過所文言（例、「如し經過の關津および沿海巡哨の官軍の驗實に遇わば即便に放行し、留難し遅慢して便ならざるを得しむる母かれ」）、『歴代寶案』譯注本第三冊第二集第一卷（二號文書）は、たとえば明朝國內でどれほど効果を發揮し得たのか。結局のところ、符文も執照も、使行の任命および復命としての役割しか擔わ

なかったのではないかと。そうすると、いわゆる「辭令書」との關係はどうなるのだろうか。そもそも在琉華人の唐旅^{とうりょ}については、辭令書が發給されたのか。このように、琉球王府の文書行政全般との關わりや、少なくとも明朝國內における執照・符文の機能（の限界）についても、著者の見解を拜聴したいところである。

なお、日明勘合の料紙と同様、琉球「半印勘合」も實物・實例は、寫本等も含めて、未発見の状況にあるという。こうした國際・外交文書は、東アジア外交文化史の重要な物質的根據であるだけに、現物資料が発見・紹介される日を、著者ともども心待ちにしたい。

第四章は、琉球王國の「海船」（貿易船）の調達・管理情況やその規模について、王府の主體的動向にも注意を拂いつつ詳述した論稿である。もちろん、「海船」の管理・運営・派遣情況については、前章において檢出・検討した半印勘合の一覽が活用されており、行論は非常に説得的と思われる。琉球の「半印勘合」と符文・執照を對照させ、「海船」の字號や名稱を網羅した附載の表は、今後の研究の基礎を築く作業としても特筆されよう。

本章で解明された主な點を列べると、①明朝から琉球へ下賜された「海船」は多く明朝の衛所において字號（例、「勇字五十九號」）により登録された軍船であったこと、②それは「四百料」船と通稱されるような規模のもの（日本の千石船より少し大きい程度）であったこと、③しかしながら一四五〇年代、明朝から琉球への「海船」下賜の事例は見られなくなり、以後、琉球が福建あたりで建造・購入することになるが、その新造船は舊來の船の倍の大きさ、八百料船ないし千料船のレベルに達したのであろう

こと、④そして、一五二〇年代以降には一轉して、乗船員數・積載朝貢品の數量ともに半減し、要するに琉球で造られた「海船」は小型化したこと、などが挙げられる。

ただし、疑問點が皆無、というわけでもない。上記③「船體の巨大化は、第一章で示された如く、琉球王國の朝貢貿易最盛期が過ぎた段階の現象である。たとえ「琉球の朝貢活動や交易活動の適正規模を示すと考えるべき」(一四二頁)と言われたとしても、第一章の結論との懸隔に讀者はとまどいを禁じ得ない。この時期琉球王國では、朝貢貿易以外の中繼貿易が擴大したということなのであろうか。そうなる琉球王國の大交易時代は、かつての通説(十六世紀初頭)とも著者の主張(十五世紀前半)とも異なり、十五世紀後半に指定すべき、ということになるのか。

ちなみに、最近、一四八〇年代に環シナ海域での物流・貨幣流通量が擴大するのではないかという指摘が相次いでいる(大田由紀夫「渡來錢と中世の經濟」、村井章介ほか編『日本の對外關係4 倭寇と「日本國王」』吉川弘文館、二〇一〇年、一七五頁以下。東島誠『自由にしてケシカラン人々の世紀』講談社選書メチエ、二〇一〇年、九七―九八頁。櫻木智一『貨幣考古學序説』慶應義塾大學出版會、二〇〇九年、一九四頁以下。拙著『中華幻想——唐物と外交の室町時代史』勉誠出版、二〇一一年、二一八頁注(66)。とりわけ、大田氏は、十五世紀後半の日本への唐物の流入は、琉球經由が主體であつたかと推測している。琉球の進貢船は、朝貢だけでなく、中繼貿易にも使用されたことは疑いなく、その進貢船のサイズ倍増という新たな論點も、こうした東アジア海域全體の動向とまったく無縁ではなからう。それゆえ、上記の

如き懸隔や違和感を解消すべく、著者にも相應の議論を展開して欲しかった。

また④については、通説も踏まえ、ポルトガルによるマラッカ陷落(一五一一年)が大きな影響を與えたたと著者は想定しているようである。だが、著者自身が含みを残しているように、この時期の《落ち込み》の背景は、明朝の中央・地方財政との關係を含めて、さらに考察する餘地があるような氣がする。この點、著者ならびに識者の御教示を仰ぎたい。

そして、①に關して、「海船」の下賜とともに、「その運用に携わった多數の船乗り集團」(二三五頁)が「下賜」されたのかどうかは、やはり殊更に論證が必要と思われた。少なくとも本章では、「船乗り集團」について正面から論じた箇所は多くはない。恐らく、第一章で「閩人三十六姓下賜」の《元ネタ》とされた、「火長」・「梢水」や「優免差役」の存在(三二―三三頁)を想定すれば良いのであろうが、「海船」との關連で、船員下賜の與否は是非とも知りたいところである。なお、操縱用船員がそのまま琉球での運行に従事したとの見通しが本書二二頁にも述べられるが、踏み込んだ論證がなされているわけではない。

評者がなぜこの點にこだわるかといえ、ここにこそ、後の「地上の海船」(高良倉吉氏の學說「高良「琉球王國の構造」」吉川弘文館、一九八七年、一一四頁)と言われるような軍船・軍事組織が生まれる契機があつたと推測するからである。もとは軍船であつた「海船」が下賜されると同時に、その操縱集團「水軍勢力が同時に下賜されるとすれば、それこそ著者が想定するような「明朝沿海衛所の軍船組織との關わり」(一四九頁)があつて

も不自然ではなからう。ただもちろん、評者自身、根據に乏しいかかる妄想に固執するつもりはない。著者におかれては、「海船」を操る人間集團の方面についても、今後、鋭いメスを入れて戴きたいと思う。

第五章は、明初の中國周邊部分に生まれた「新興通商據點國家」(このカテゴリーは著者による創造)である琉球・マラッカ・ハミを相互比較し、その成り立ちや特質を押さえるという論稿である。近年の歴史教育(世界史教育)では、「つなぐ」こと(因果関係)と「くらべる」こと(比較)との重要性が謳われており(小田中直樹『世界史の教室から』山川出版社、二〇〇七年)、歴史的思考力を養成する秘鍵として脚光を浴びている(桃木至朗『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史——歴史學と歴史教育の再生をめざして』(阪大リーブル)大阪大學出版會、二〇〇九年)。後者の手法(「くらべる」)により琉球王國の實態・特徴に迫った本章もまた、そうした流れに倅さすものと言えよう。もちろん、本章の成果は、今後の世界史教育などに積極的に取り入れられるべきものと考ええる。そしてこれに關連して、マラッカと琉球との比較の延長で、琉球と他の周邊朝貢國とのあいだの競合といった點も、今後ぜひ知りたいところである。

ところで、琉球の朝貢頻度のグラフは第一章(一八頁)に掲載されていたが、本章に示されたハミとマラッカの朝貢頻度グラフ(一八九・一九四頁)も貴重な成果である。これまでの研究論文や概説書等で頻用されていた秋山謙藏氏による朝貢頻度の集計は、『明史』のみによる不完全なものだったからである。なお、本章の焦點の一つ、ハミの動向を把握する上で極めて重要なオイラスト

の動きについては、明朝との關係を中心に、もう少し丁寧な解説があつた方が門外漢(とくに海域アジア史關係者)には分かりやすかつたと思うが、いかがであろうか。

第六章では、「朝貢體制」論の内在的な批判を企圖しつつ、比較的自由に設定されていた琉球王國の「貢道」(朝貢ルート)およびその「入り口」たる「入貢地」に關する検討を行なう。評者も、手垢にまみれた明代「冊封體制」論(ないし「東アジア世界」論)の内在的再検討の必要性を感じており(拙稿「冊封體制」論を見直す、『ニューサポート…高校社會』一六號、二〇一一年)、また日本の遣明船の入貢地(入港地)や貢期についても深い關心を寄せていることから(拙稿「再論、十年一貢制」、『日本史研究』五六八號、二〇〇九年)、實に興味深く讀ませて戴いた。とりわけ、琉球において「朝貢體制」は基本的に「手段」として機能していた(二二七頁)、と喝破した點は、まさしく卓見といえよう。だからこそ、著者の言うように、朝貢貿易の「利益」が失われつつあつた十六世紀の後半期、却つて琉球が中華國際秩序(朝貢の論理)を聲高に叫ぶようになったのであろう。手前味噌で恐縮だが、評者も、このように《既存の制度や法を逆手にとって利用すること》——ロジェ・シャルチエのいう「我がものとしての利用(appropriation)」(譯語は近藤和彦『民のモラル——近世イギリスの文化と社會』(山川出版社、一九九三年)五五頁による)——の重要性について觸れたことがあり(前掲拙著『中華幻想』一八頁、たいへん意を強くした次第である)。

ただし、このことと關連して、本章第二節タイトルにも掲げられている、「行爲としての朝貢」というフレイズは若干分かりに

くいような気がした。朝貢が「行爲」であるのはなかなば自明であり、むしろ著者が強調するように「手段としての朝貢」（「點點評者」と言い切ってしまった方が、讀者にも意圖がよく傳わるのではなからうか。もっとも、著者は「手段」以上の含意を想定しているのかもしれない、機會を改めて詳細な説明を伺いたいと思う。

また、やや細かいようだが、市舶司が泉州から福州へ移轉する事由について、本章には言及がなかったように見受けける。讀者のためには、本書第一章三〇頁に紹介された、處州窯系青磁の有利な買い付けのため、とする龜井明德氏の説を改めて紹介する必要があるだろう。さらに、「琉球の入貢路は福建經由を原則としつつも、場合によっては臨機應變に對處するという方針だった」（二〇九頁）と想定する池谷望子氏説への疑問を呈する際、彼説の論據であり、再検討の對象ともなる『明孝宗實錄』の記事が本書に引用されていないのは、いささか不親切と思われる。

なお、永樂年間まで、琉球船が浙江の寧波に來泊したという『明實錄』の史料については、現在、評者は琉球船と日本船との混同という可能性も想定すべきと考えている。推測に推測を重ねることになるが、洪武・永樂期の日本は、明朝中國にアクセスするために、大洋路（博多―寧波間）ばかりでなく南島路（南西諸島經由）を使用していた形跡があり（拙稿「中世の國際交易と博多」、佐藤信・藤田覺編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社、二〇〇七年。佐伯弘次「應永の外寇と東アジア」、『史淵』一四七輯、二〇一〇年）、琉球船とともに渡海した日本船が泉州から寧波へ周航する際、琉球船もさらに同道した蓋然性は否定できないように思う。上記はもとより史料の根據に乏しい憶測であ

るが、ひとつの可能性として提示しておきたい。

第七章では、これまでと一轉して、琉球の域内社會に光をあてつつ、琉球王國の交易品について論じている。交易品目を域内産品と域外産品とに振り分け、その推移から琉球王國の域内支配構造の確立過程をたどるという内容である。十五世紀後半に朝貢品として登場するようになる土夏布などの加工生産品が、胡椒などの南海産品の代替品と位置づけられ、ここでも十五世紀中葉に「分水嶺」が想定されている。

また、琉球王國時代にも前代と同様にヤコウガイ・タカラガイ交易の隆盛があったと見なす俗説（通説）に對しても、實證的に《否》を突きつけ、琉球物質文化史の抜本的な捉え直しを要求する。「琉球王國の海上交流史を琉球弧の側に取り戻す」（二四〇頁）という著者の言葉を直接に反映した論稿だといえよう。

なお、こうした域内産品を効率よく琉球王國に吸い上げ、中國に朝貢品として持参するシステムは、金城正篤氏（『冊封體制と奄美』、『琉大史學』一二號、一九八一年）が早く注目し、最近では桃木至朗氏がより普遍的に「衛星朝貢體制」と名付けている（『中世大越國家の成立と變容』大阪大學出版會、二〇一一年、一五四頁）。史料の殘存狀況からすると實に厳しいが、今後は、琉球弧におけるその具體的なメカニズムの解明が期待されるところである。

本書の掉尾を飾る「むすびにかえて」では、以上の論稿のまとめが改めて示されるとともに、各章の研究史的意義についても述べられている。讀者はやはりここから入って各章を読み進めるのが順當なのではなからうか。

以上、本書の各章について、評者なりの要約とコメント等を、縷々述べてきた。最後に、全體的な感想を幾つか申し述べることを許されたい。

第一に、本書では、本書評冒頭にも述べた通り、等身大の琉球王国が描き出されている。過大でもなく過小でもなく、事實に即して、琉球の世界史的的位置が布置し直されたのである。本書により、これまで考えられてきた「琉球の大交易時代」像は、抜本的な改変を餘儀なくされたと言つてもよいだろう。たもちろん、その結果として、古琉球史研究じたいが新たな宿題を多く抱え込んでしまったこともまた眞實である。高良倉吉氏や眞榮平房昭氏、豊見山和行氏らの仕事を頂點とする、國際交流史を十分加味した古琉球國內（域内）史とよつに組むことも、本書を上梓した著者の重大な責務であろう。ただし、古琉球史研究でまだまだやれることがある、と示してくれた本書は、われわれ後學にも多大な勇氣を與えくれる、偉大な業績と言つて差し支えあるまい。

第二に、本書が極めて冷徹な實證的研究だという點である。本書を綴ればただちに分かる通り、著者岡本氏は、もっぱら『明實錄』や『歷代寶案』など、驚くほどメジャーな史料を利用している（もちろん新史料も用いてはいるが）。そしてその分析手法も、中國史の『古風』な歴史分析を敢えて行ない、また愚直に統計をとるなど、極めてオーソドクスである。奇を銜つた概念化や抽象化も、浮き足だった敘述も一切見られない。評者などからみるとあまりにストイックに映る。この點は間違いなく長所であるといえよう。研究史を振り返ってみるに、かつて那覇久米村に祕藏されていた難讀史料の『歷代寶案』の検討がかなりの程度進み、そ

れが一周りしたくらいところで、本書の如き冷静な分析が可能になったということであろうか。そう評價したくなるほど、本書で論證された事實はいちいち説得的で、納得させられることばかりである。換言すれば、これまでの琉球の外交貿易史研究は、史觀・視座や方法論も含めて青年期にしか達しておらず、本書のとき緻密な論證を経ることによって、ようやく成年に到達したとさえ言えるように思う。

第三に、ただし長所は、ただちに短所にも轉ずる。無闇に概念化を行なわない、ということとは、先行研究との抽象的レヴェルでの関連性が掴みづらい、ということでもある。評者の無知蒙昧ぶりを棚において言わせてもらえば、隨所に引かれ、批判の對象となつている高良倉吉説（四四・一三〇頁など）も、どのような點で問題となつているのか、一讀ではなかなか理解しづらかった。

また、第五章で著者が提起する「新興通商據點國家」も、何となくは理解出来るのだが、その明確な定義や範疇、具體例などがさうに知りたいところである。とくに、村井章介氏がかつて提起した「貿易商社・琉球王國」（村井章介「古琉球と列島地域社會」、『新琉球史』古琉球編、一九九一年）というキャッチフレーズは、この「新興通商據點國家」の視點とどのような關係にあるのか。先行學説との相違について、全般的に、もう少し踏み込んだ詳しい記述があつても良かったように思う。

第四に、これと関連して、本書では古琉球史の《幹》の部分が再構築されたことは間違いないとしても、それに附隨する《枝葉》の部分がやや物足りないと感じた。《枝葉》の部分でも評者がとくに關心を抱くのは、貿易の利潤や經營の方式といった問題

である。最近、小葉田淳氏の附搭貨貿易論への批判も出されており（邊土名朝有『琉球の朝貢貿易』校倉書房、一九九八年、第一部第二章。ただし評者もこの批判の當否は未検討）、今後、こうした論點についても、著者が冷徹な判断を下してくれることを切望したい。なぜなら、どれほどの利潤やコストが見込まれていたかは、交易・交流の動機を考える上で決定的な要素であったはずだからである。たとえば、十五世紀前半期の明使柴山の琉球での收買（本書第七章参照）時に琉球から提出された物價報告では、日本製の屏風が、日本での市場價格の約五倍近くの價格に設定されていたことが分かっている（参照、榊原悟『美の架け橋——異國に遣わされた屏風たち』ペリカン社、二〇〇二年、九九頁以下。日本屏風の價格については、泉萬里『光をまとう中世繪畫——やまと繪屏風の美』〈角川學藝出版、二〇〇七年〉第三章がさらに詳しい）。このほかの日本製の工藝品や半製品、礦物資源などではどうだったのだろうか。琉球王國の中繼貿易の實態に關わる問題であるだけに、全容に迫ることは不可能としても、今後、こうした點を掘り下げて戴きたいと願う。

第五に、望蜀と言うべきか、本書の總括として、やはり時系列的なまとめが最後に欲しかった。地圖もあれば良いと感じたが、それ以上に、著者が最終的にどのような新しい琉球史像を打ち出したのかについて、大掴みに把握できるような工夫があつて然るべきであつたように思う。それがあれば、本書でも手薄とならざ

るを得なかつた日本との關係についても、ある程度の見通しが得られたのではないか。また、本書の實證的作業の末に浮かび上がつてきた、十五世紀後半琉球王國の海域史上の位置づけ（貿易立國琉球の質的變化？）という問題も、より厚い記述が期待できたのではなからうか。もつとも、これらの諸點については、また別のかたちで公表されることを待ち望みたい。

以上、本書評のなかで、疑問點らしきことを縷々述べてきた。しかし、その多くは揚げ足取りや無い物ねだりに過ぎない。さらに、『矛盾』と思われるような點の指摘についても、本書によつて初めて明らかにされる事柄をどのように位置づけるか、いまだ固まっていないからこそ生じた事態と思われる。譬えは悪いが、新しい考古資料が発見されて、それまでの通説にうまく接合しないために學界全體がとまどつてしまつた、というようなイメージであらうか。甚だ印象的な表現で申し譯ないが、全體を通じて評者はこのように本書を受け止めている。讀者諸賢におかれては、是非とも直に本書を手にとつて、新たな古琉球史、東アジア海域史、そして明代國際關係史の息吹を感じ取つて戴きたいと思う。評者の誤讀・曲解・妄言については、讀者・著者ともども、ひらに御容赦戴きたい。加えて、本書評の提出が遅れたことを、關係各位に深くお詫び申し上げる。

二〇一〇年三月 宜野灣 榕樹書林

A 五判 二六四頁 八〇〇圓